

福 井 県 医 師 会

だより

第682号 平成30年(2018)4月



春景 鯖江市 清水 元博

表紙写真説明：春景（越前市・吉野瀬川）

鯖江市 清水 元博

平安時代以降、桜は花の代名詞のようになり、春の花の中でも特別な位置を占めるようになりました。特に、桜の花の下での宴会は、春の風物詩となっています。

又、桜は、道路や河川、線路等に沿って植えられる事も多く、河川などの両側に桜が並びトンネルのような形状になっているものは、「桜トンネル」と呼ばれます。

吉野瀬川堤防は、両岸に約260本の桜が植えられています。特に、川にとっても近く植えられているため、満開となると桜が川に降るように覆いつくす姿が楽しめます。

撮影当日は、青い空とサイド光に輝く桜並木のたたずまいが大変印象的でした。

醫 縫 録

大学で働くということ… 救急総合診療雑感

福井大学医学部附属病院救急部・総合診療部教授 林 寛 之



福井県立病院から福井大学に異動して早7年が経過しました。私の師匠である寺澤秀一先生（現地域医療学講座特命教授）が福井県立病院から大学に拉致（？）された時には、火中の栗を拾う勇気を称賛して眺めていました。大学病院に北米型ERなど、病院全体が臨床に向き合えないとできないことです。ましてインパクトファクターが横行する大学病院でなど無謀な賭けにも見えませんでした。しかしながら、福井大学は今では国立大学の中では群を抜いて、「断らない救急」に応える病院に成長しました。多くの診療科の協力のおかげです。「研究」「臨床」「教育」のどれにも力を入れているのは、頭が下がります。偉大な師匠を持って幸せ者です。福井県立病院時代に育児休暇が取れたのも寺澤先生のおかげなのです。

前職の福井県立病院では着実に後期研修医も増え三次救命救急センターのシステムも成長しましたが、様々な事情があるのでしょうか、当時の院長から「救急だけ後期研修医をたくさんとるわけにはいかない」と後期研修医の応募が7人もありながら、1人まで減らされたということが、2年続きました。新専門医制度が始まる今年から考えるとありえない判断でした。3年目は応募者すら減ってしまうという始末。立場が違えば意見も違うのは当然であり、物事の見え方も違います。その時々リーダーに従うのは組織として重要ですし、こんな未来が待っていようとは…。今では代替わりし、ICU管理も担う素晴らしい救命救急センターとして石田浩救急科長がERを大成長させました。

隣の芝生は青く見えるもので、そんななか「教育」を中心にそろそろ異動はどう？と声をかけてくださったのは師匠の寺澤先生でした。正直バリバリ臨床をしている方が性に合っていました。タイミングとは恐ろしいもので、もっと若手を育てたいという気持ちの方が勝りました。隣の芝生はドバイの高級ホテル並みに見えました。皆さん、隣の芝は青いところとそうでないところが必ずあるものです。一長一短すべてよろしいってことで。

大学では給料の低さや〇〇の話はタブーであ

り、モチベーションを保つのは大変ですが、海外交流は視野を広げ、若者達が多いのは刺激ややりがいも多く、いい点もあるものです。救急総診では若先生達から随分生き血…ではなく元気をもらってます。さらに真っ白な医学生をどう成長させるか。大学では、自分のしたいことを追及して究極の専門性を身に着ける有能な医者も必要ですし、患者目線で断らない医者を養成するのも重要です。多くの卒業生は地域に出るわけであり、ある程度臓器に関わらず患者の期待に応える医者も養成しないとイケません。「うちじゃない」「専門バカだから」という発言は「患者の期待には答えない」と言っているに等しく、これを若手医師が言うのを見るのはとても悲しくなり、他科コンサルトしやすい大病院でしか働けない医者になってしまいます。医学生の2割は放っておいても優秀、下2割はイマイチ君、しかし残りの6割の医学生を心ある医者に育てるのが大事と思っています。

若先生にはぜひ地域に出てほしい。地域で必要な医療は地域でしか学べず、地域に飛び込まないと自頭力のある医者としての成長はありません。新専門医制度も蓋を開ければ、福井は内科全国ワースト3、外科は全国ワースト2、総合診療は0と惨憺たるものでした。若者たちが福井に残ってくれるようになるには、教育の充実が不可欠と考えます。将来のドクターGになってもらうべく、知識や技術を惜しみなく伝授する想いは熱く持っているのですが、若先生には「うざい」のかしら？「自慢話」、「昔話」、「説教」は封印しています。それともデイズニーランドでも誘致しないとイケないのでしょうか。私はそもそも昔から上司の命令には「Yes」または「はい」でしか答えられない環境で育ったもので、川の流れのような人生も悪くはないと思います。福井で一緒に頑張ってくれる若先生が増えてくれることを願ってやみません。